

## 前回までのあらすじ

流遠るとおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。  
学校があつて、友達がいいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまふ。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゅう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思つていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘アサトたちばな、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。彼等はゼヘナを危機に陥おとしれている別の敵性体——〈ブレケース〉の存在を知り、その打倒に協力する事となった。

〈機獣少女〉の域を超えたキリエ変異態。彼女を止めるべく戦うカナコ、ルイゼ、クラウ、ライカ、バニラの五人。

一方、やみひめとツバキは、〈ステインガー〉から現れた少女カグヤ・イザヨイとの対話を経て、彼女のMBデバイス——と同質であるう——〈シラヒメ〉共々、別の世界から来た事を知る。敵対する意思のないカグヤが、やみひめ達と同行する事を決めた直後、青白い閃光が夜空に奔はしった。ツバキは事態を把握するため、移動を提言。その時、やみひめと、MBデバイスの〈カグツチ〉と〈シラヒメ〉は、異質な気配を感じていた。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

不意に感じた異質な気配。だがそれを感じているのはやみひめと、MBデバイスである〈カグツチ〉と〈シラヒメ〉だけらしい。

「……どうしたの？」

ぼんやりとした表情のまま、やみひめに問いかけたのはカグヤ・イザヨイだ。倒した〈ステインガー〉の頭部から現れ、やみひめとツバキを攻撃した少女。〈分断するもの〉によって正気を取り戻したカグヤは、別の世界からの転移者らしく、対話の結果、同行に応じてくれたばかりだった。

見た目の年齢は高校生くらい。美醜を問うなら間違いなく美人だろうが、その装いと雰囲気は独特だった。右目を覆う眼帯と、日常生活ではまず見かけない、白を基調としたゴスロリファッション。長い黒髪は適当に切ったかのように長さが不揃いで、黒い左目はどこか虚ろ。終始ぼんやりとした表情は、見る者を不安にさせる。

カグヤの隣では、ツバキも不思議そうな表情を浮かべている。普段は大人びていても、そういう表情だと年齢相応に幼く見える。

「判らないけど、なにかいる……」

やみひめが周囲を見渡しながら言う。ほんの数日前までは、多くの人の営みがあったとは信じられない、今は廃都市のような有様の街。あちこちに戦闘の傷跡があり、不可抗力とはいえ、それが自分達によるものだと思うと申し訳なく感じる。乗り捨てられた車両、人のいない建造物、夜空にはそれらを照らす二つの紅い月。

そして、やや離れた場所で横たわる〈ステインガー〉の巨大な骸。

『——っ？』

『来るぞ……！』

同時に反応する〈シラヒメ〉と〈カグツチ〉。その様子から、二人の緊張が頂点に達しているのが嫌でも伝わってくる。

何が始まるうというのか……。

「!? …………嘘——」

異変に最初に気付いたのはツバキだった。彼女の視線を追うと、信じられない光景が目に入った。

「……浮いている？」

ぼんやりとした表情は変わらないが、カグヤの口調には困惑が感じられた。全長約百メートルの巨大な質量が、見えない超重機で吊り上げられているかのようになり、少しずつ浮き上がっているのだから当然だろう。

そう。〈ステインガー〉の骸が宙に浮いていた。

脱力したように、長い尾と八本の節足が垂れている様子を見ると、「ステインガー」が自力で浮遊しているようには見えない。

「攻撃を……っ」

はつとなり、薙刀状態なぎなたの「カグツチ」——消耗が激しいため「フラスター・システム」は解除してある——を構え戦闘態勢を取るツバキ。異論はないらしく、カグヤもそれに同調し、三枚の刃から成る特殊な得物えもの——デバイス状態モードの「シラヒメ」を構える。

しかし、実際に動く者はいない。やみひめと同様、二人もその光景を固唾かたずを飲んで見上げていた。

少しずつ上昇を続け、やがて高度が五十メートルほどに達すると、「ステインガー」の巨体が弾けた。爆散したというのとは違う。細かい粒子となって、風船が弾けるように周囲に散ったのだ。だが、それで終わりではない。映像を戻すように弾けた粒子が一ヶ所に集まり、それはとある生物の姿となっていた。

もつとも身近で、もつともよく知る生物。

「人……?」

そう——人間だ。

少なくとも、やみひめの目にはそう見える。

『それ』はゆっくりと地上に降り立つと、当然のように此方こちらに向かってくる。距離が近づくにつれ、『それ』の姿が詳細に見えてくる。女性だ。少女と呼べるほどの幼さは皆無で、若い、見た目の年齢とは不釣り合いな色香を漂わせている。畏怖にも似た、危険と死を感じさせるそれを色香と呼ぶのならだが。

「——」

ぞろつとした和服のような衣装を身に纏まとい、荒れた足場など気にする様子もなく、悠然と歩を進める。その佇たたずまいは国を統すべる女王のような気品と威厳に満ちていた。

「——ようやくってくれたのう。おかげであの身体からだは駄目になってしもうたわ」

『それ』はやみひめ達の眼前で立ち止まると、言葉とは裏腹に、笑みすら浮かべて言った。まるで勝者に対し、自分を倒した事を称賛する敗者のように——いや、『まるで』は余計かもしれない。目の前の女性が「ステインガー」であるのなら、これは比喩ではなく事実なのだから。やみひめとツバキは確かに「ステインガー」を倒した。その巨体を支えていたであろう、重力制御装置に相当するシステムを破壊して。

「しかしまあ、この星で活動するには、この大きさと姿の方が適しているのかもしれないな。」

なんと言ったか……そうじゃ、収斂進化しゅうれんだったかの  
収斂進化。

似た環境で暮らす生物群は、最終的に同じような姿へと進化するらしい。

『それ』は自らの手足を興味深げに矯めつ眇めつし、やみひめ達の事など眼中にないかのようだ。

「なるほどのう。人間も機獣も、この星で生きていく以上、このカタチに行き着くのであるうな。……ん？」

『それ』が何かに気付いたような素振りを見せた。『それ』に意識は向けたまま、やみひめは視線を傍らかたわに立つツバキへ向けると、彼女は極度の緊張からか過呼吸を起こしており、今にも倒れそうな状態だった。

「ツバキ……っ!？」

初めて〈ステインガー〉と対峙した際も竦んで動けなくなっていたが、その時よりもひどい状態だ。彼女に限らず、この星の人間であれば、誰もが〈ステインガー〉に対して根源的な恐怖を感じるらしい。巨大な機獣ではなく、人間の姿を採つていようと、その本質は何も変わらないという事か。

「ふむ。そんなにも妾わらわが恐ろしいか」

ツバキの身体からだを支えてやると、不意に震えが止まった。少しずつ呼吸が落ち着き、顔色も良くなっていく。

「……大丈夫？」

「はい……もう、大丈夫です。すみません」

ツバキはなんとか笑みを浮かべながら答えた。まだつらそうではあるが、無理をしている様子はない。

見れば、『それ』の雰囲気はどこか変わっていた。ツバキほどでないにせよ、やみひめも『それ』が放つ威圧感のようなものは感じていた。ただ目の前に立たれるだけで圧倒されてしまうような、存在そのものが脅威であるかのような威圧感。それが今は緩和かんわされている。

『それ』は何もしていない。少なくとも、何かしたのを見てはいない。

『——力のほどんどを異空間に移したか』

『これでようやく、まともに話が出来そうだよ』

沈黙を保っていたMBデバイスが口々に言った。恐らく、『それ』は自分の力——他者を威圧するほどのそれを、何処か別の、やみひめ達には知覚出来ない場所に切り離れたのだろう。

「……どういう事？」

『カグヤは気にしなくていいよ。とても難しい話になるからね』

カグヤの問いを、〈シラヒメ〉は慣れた様子で受け流した。中性的で穏やかな声音のため誤魔化されそうになるが、冷静に考えるとなかなかひどい扱いである。

「……そう」

ぼんやりとした表情のまま、カグヤは特に気を悪くした様子はない。加えて、ツバキのように怯えてもいない。やはり惑星ゼヘナの出身でなければ、〈ステインガー〉に対する根源的な恐怖——『畏れ』は感じないようだ。

「ほう。我が同胞よ、お主等は人間に使役されていながら、自我を失っておらぬようじやの」

『自我を……？』

『それ』の言葉に〈シラヒメ〉が反応した。

『言葉を解するだけの知性があるのなら、訳の判らぬ事を宣う前に、まずは挨拶のひとつとしてはどうだ？ その程度の礼儀も弁えておらぬでは、器が知れるというものよな』  
対して〈カグツチ〉の態度は、カナコと接する時以上に挑発的だ。だがこれも、手にしたツバキに向けた『呑まれるな』という合図だったのかもしれない。

「————」

無言となり、『それ』から表情が消える。人間の尺度で考えれば、〈カグツチ〉の態度に機嫌を損ねたと取るべきだろう。

しかし——

「……お主等は——」

何かを言いかけ、『それ』は続く言葉を飲み込んだように見えた。気付いた事があって、しかし言うか否か迷い、結果言うのをやめた。やみひめには、そんな風を感じられた。

「ふっ、然り。妾は礼を欠いておったようじゃ」

だがすぐにその表情は、薄っすらと笑みを浮かべた余裕を含んだものに戻った。『それ』の中で、何かに対する心の整理がついたのか、あるいはやみひめの思い違いであったのか。

「妾は己等が〈ステインガー〉や古代種と呼ぶ存在じゃ。名はサクヤヒメ——そう呼ぶ事を許そう」

『それ』は——サクヤヒメと名乗った存在は、やはり〈ステインガー〉であるらしい。

「呼ぶ際は最大限の敬意を払えよ？ 愛しい者から貰うた大切な名じゃ。不心得者は妾の逆鱗に触れると知れ」

やみひめ達を威圧しないための配慮かどうかは不明だが、今はその力を切り離している

にも関わらず、改めて凄味を感じさせる。それだけ彼女にとって、『サクヤヒメ』という名前は大切なものなのだろう。

(名前を付けてくれた人の事が、本当に好きだったんだろうな……)

古代種である上に、〈ステインガー〉はずっと封印されていた。ならばもう、その『愛しい者』は存命ではないだろう。事情も何も知らないが、そう思うと少し悲しくなる。

「サクヤヒメさん……」

最初に名前を呼んだのはツバキだった。いつもは澄まし顔を浮かべている彼女だが、まだ極度の緊張状態から解放されたばかりで、本調子には見えない。

「初めまして。私はツバキ・タカチホと申します」

サクヤヒメの意識が向けられるのを待って、ツバキが名乗った。彼女は常に丁寧な言葉遣いだが、サクヤヒメの口調や迫力に当てられてか、普段以上に畏まっているように感じる。

「うむ」

「単刀直入にお伺いします。……貴女の目的は何ですか？」

その場に緊張が走る。

封印から目覚めた〈ステインガー〉は東方大陸を北上し、進路上の人口密集地を襲撃した。それは〈ジェネレーター〉に組み込まれたMBコアを、幼体の餌とするため——つまりは繁殖のためだ。だが、それは生物の本能的な行動であって、目的と呼んでいいかは微妙なところだろう。

しかし、今のサクヤヒメは人間と変わらない。知性と理性を兼ね備えている。ならば明確な目的があるかもしれない。それがやはり繁殖であっても、言葉が通じるのならば、争わなくとも済むような妥協点を探れるかもしれない。そうツバキは考えたのだろう。

「気丈な娘よ。しかも賢いと見える」

サクヤヒメは愉快そうに言い、右手をツバキに伸ばした。

「脅えずともよい。幼子にはこうして愛情を表現するのであるう？」

びくりと身を震わせたツバキの頬にそっと手を添え、サクヤヒメはそのまま右手を頭上に移動させ、彼女の黒い髪を優しく撫でた。サクヤヒメの肩をくすぐるような長さの黒髪が、撫でる動きに合わせてさらりと揺れる。初めは緊張を隠しきれなかったツバキだが、今はそれを不思議そうに見上げていた。

共に和服で黒髪のため、その様子は傍から見ると、年の近い親子に見えなくもない。

「本当に残念じゃのう」

「……えっ」

サクヤヒメは紅い瞳を細め、腰を折りツバキの耳元に口を寄せると、溜息を吐くように言葉を続けた。

「――妾は己等を滅ぼさねばならん」

「っ……………!?!」

ツバキは咄嗟にサクヤヒメを突き放し、距離を取った。慌ててやみひめはツバキを庇うように立ち塞がり、臨戦態勢の構えをとる。一方のサクヤヒメは軽くたたらを踏んだだけで、攻撃の意思は見せない。そもそもサクヤヒメにしてみれば、反射的に手が触れた程度の衝撃しかないはずで、あの場でツバキを殺す事だつて出来たはずなのだ。

『大丈夫か、ツバキ！ 貴様……ッ!?!』

「猛るでない。妾は何もしておらんぞ?」

激昂する（カグツチ）に対し、サクヤヒメは涼しい顔で言った。確かに何もしていない。だが、ツバキの表情は先にも増して顔面蒼白で、全身が震えている。慌ててやみひめが支えたが、そうでもしなければ立ってられない状態だ。

『悪趣味だね。異空間に切り離れた力を、今は身体に戻している。そんな状態の君に耳元で囁かれたりしたら、下手をすればショックで心臓が止まっていたかもしれない』

「……………」

穏やかな口調のはずなのに、心なしか（シラヒメ）の声には怒気が含まれているように感じた。それは彼を装備しているカグヤも同じだ。ぼんやりとした表情は変わらないのに、サクヤヒメを見つめる黒い瞳には敵意を感じる。

そして、それはやみひめも同じだった。

「…………ふっ。随分と嫌われたのう」

「当然だよ!」

物理的に傷付けるだけが暴力ではない。心の傷も同じか、それ以上に痛みを伴うのだ。

「あ…………っ…………うう…………」

震えながら胸元に顔を埋め、喘ぐように声にならない声を発するツバキを見下ろし、やみひめは堪らない気持ちになる。これは怒りの感情だ。

「ねえ、どうして滅ぼすの?」

「己等が我等を滅ぼそうとしたのと同じ理屈じゃ。我々は共存など出来ぬ」

「……………」

「判っておるようじゃの。なまじ言葉が通じるから、話し合えれば解決すると思っしてしま



う。じゃが、そんな事はない」

互いに譲れない。妥協点を見つけれない。だから争いになる。

そんな事は平和な日本で暮らしていても知っている。

「己はなかなか厄介そうじゃ。故に——」

サクヤヒメが無造作に右腕を掲げる。

「此处で消えてもらおう」

「……っ!?!」

無造作に掲げられた和服の袖の内側から、勢いよく何かが飛び出した。鉄を備えた多関節の腕——(ステインガー)のそれをそのまま縮小したような——が、口を広げた蛇のように迫る。速い。動けないツバキを支えている事もあり、迎撃も回避も間に合わない。このままでは間違いない二人とも串刺しにされる。

(アサト……っ!?!)

思わず目を閉じて、逢いたい人の名前を心の中で叫んだ。

そうする事しか出来なかった。

しかし、すぐにでも訪れるであろう痛みや衝撃はなく、やみひめは恐る恐る瞼を開き、目の前の光景に啞然とした。見えるのは白いゴスロリ衣装の後ろ姿と、

その背中から生えた、赤い液体を滴らせた鉄の先端……。

サクヤヒメの攻撃から二人を護ってくれていたのはカグヤだった。左腕から伸びた

アーム支持腕の先の楕円形のシールドと、同じく右腕から伸びたアーム支持腕の先の(シラヒメ)、そしてカグヤ自身の腹部を貫通し、高速で放たれた鉄は、しかしやみひめ達まで届かずに停止していた。

「……ふん。興醒めじゃ」

呟き、カグヤを串刺しにしていた鉄を袖の内側に戻すと、サクヤヒメは此方を一瞥すらせず姿を消した。

「……カグヤ？」

鉄を抜かれたカグヤがその場に膝を突く。こぼりと生々しい音を立て、赤黒い液体が地面に撒き散らされた。

「カグヤ……っ!?!」

地面に突っ伏しそうになる上半身をなんとか支える。同じく支えないといけないツバキもいて、姿を消したサクヤヒメも放ってはおけない。だがまず優先すべきは重傷のカグヤで——

『やみひめよ、落ち着け。まずはツバキを寝かせる。大丈夫だ、もう落ち着いている』

パニックに陥りかけていたところで、〈カグツチ〉の冷静な声音に救われた。サクヤヒメの姿が消えたためか、ツバキは気を失ったように眠っていた。

「う、うん……」

指示に従い、まずはツバキをゆっくりと地面に寝かせる。続いてカグヤを背中から抱くような体勢で、ゆっくりと腰を下ろす。

『上半身を少し起こし、気持ち傾けてやれ。血が喉に詰まってしまうぬようにな』

〈カグツチ〉に言われた通りにすると、カグヤはまた少量の血を吐き、数回咳きこんだ。

「次はどうすればいい!?!」

『……ここまでだ。この場では処置のしようがない』

「じゃあ、病院まで運んで——」

『間に合うとは思えん。下手に動かすのも危険な状態だ』

はつきりと断言するのは、カグヤがどうなってもいいからではない。曖昧な言い方でやみひめに期待を持たせないための、〈カグツチ〉なりの気遣いだ。それが判ってしまい、もう何も言えなくなる。

「カグヤ……」

白いゴシックロリータの衣装を自分の血で赤く染め、瀕死と判る状態で瞼を閉じているカグヤを見つめ、やみひめは絶望的な気持ちになる。アサトの事を想ったら、アサトに似た少女が身を挺して護ってくれた。だが、彼女はアサトではない。出会ったばかりの他人だ。やみひめを命がけて護る理由などないはずなのに。

『——気に病む必要はないよ、〈キョウシュウキ〉……いや、この世界では『やみひめ』だったね』

「〈シラヒメ〉……!?!」

束ねられていた三本の刃は砕け散っていたが、どうやらMBコアに相当する部分は、無事な基部に納められていたらしい。

『大丈夫かい、カグヤ?』

「…………すごく痛い」

意識はあつたらしい。〈シラヒメ〉の呼びかけに、やや億劫そうに答え、カグヤは瞼を開いた。言葉とは裏腹に痛みなど感じていない様子だが、だとしても瀕死の重傷である事は変わらない。

『だろっね』

だが〈シラヒメ〉の態度は苦笑交じりで、心配している様子は皆無だ。

「……あたし、死ぬのかな」

『……だろうね』

言葉は同じだが、今度のそれは慈しむような意味合いニュアンスに変わっていた。親が、がんばった子供を褒めてあげるような。

「……………」

訳が判らない。どうしてカグヤと〈シラヒメ〉は、こんなにも穏やかに会話をしているのか。まるでこれが当然の結果のように……。

『言つたろう？ 気に病む必要はないんだ。僕達はきつと、このためにこの世界に呼ばれたんだと思う』

「え…………？」

『元の世界で色々とやらかしちゃってね。最後のは未遂に終わったんだけど、それでもまあ、罪は償つぐなわないといけない。因果応報ってやつさ』

カグヤと〈シラヒメ〉は、地球とも違う場所からこのゼーナに転移してきたらしい。二人が本来の世界で、どのような生活をしていたのかは知らない。だが、〈シラヒメ〉の口振りからして真つ当な——世間に胸を張れるような生き方ではなかったのだろう。だが、やみひめにしてみれば関係がない。

「ありがとう、助けてくれて」

「……………」

「何か私に出来る事、ある…………？」

「…………手、握ってくれる？」

弱々しく掲げられたカグヤの左手。それをやみひめは両手で包むように握る。それは同時に、カグヤ自身を抱き締める結果となった。

カグヤはゆつくりと目を閉じ、そのまま相棒パートナーに語りかける。

「…………〈シラヒメ〉、あたし、思い出した」

『僕もだよ。サクヤヒメに貫ぬかれたせいかな』

ショック療法とでもいうのか、二人は転移の影響で記憶に欠落があるようだったが、それが戻つたらしい。元の世界での事も、それに含まれていたのかもしれない。

「…………帰らないと。あの子が待ってる」

『僕は正直、気が進まないけどね』

〈シラヒメ〉が苦笑を浮かべる。『あの子』というのが誰かは判らないが、〈シラヒメ〉の名前を付けた人物かもしれない。嫌がらせとも言っていたので、先の発言も踏まえると、彼はその人物と相性が悪いのだろうか。

「…………やみひめ」

「え——」

両手で握っていたカグヤの左手から、何かが流れ込んでくる感覚。それが自分の中のス  
イツチのようなものを押していく。まるで眠っていた機能が解放されていくような——

「……じゃあ、ね」

瞼まぶたを開き、カグヤはこれで役目は終わったとばかりにそう告げ、次の瞬間には姿を消  
していた。何の痕跡も残ってはいない。彼女を寝かせた際に、やみひめに付着したはずの  
血も一滴残らず消えている。カグヤなどという人物は最初から存在しなかったかのように。

「……え？ カグヤ？」

白昼夢でも見ていたかのような気分だ。だとしたら、どこからが夢だったのか。

「〈カグツチ〉、カグヤは……」

『判らん。私の感知器センサからも突然消えたとしか……』

〈カグツチ〉はカグヤを覚えている。ならば白昼夢ではなかったという事か。

「……ん」

眠っていたツバキが身動きみじろし、ゆっくりと上体を起こした。

「……やみひめさん、私——」

「ツバキ!? カグヤが……っ」

動揺を抑えながら、やみひめは事の顛末てんまつを語った。ツバキもまたカグヤの事を覚えて  
おり、彼女が夢や幻たぐいの類でない事は間違いないさそうだ。

「そうですか。では、カグヤさんと〈シラヒメ〉さんは、もう……」

礼はおろか、別れも告げられなかった事をツバキは気にしているようだ。

『彼等はひよっとすると、やみひめ達やフアフロウ姉妹とは違い、通常の転移とは違う方  
法でゼヘナに来たのかもしれない』

やみひめ達『地球組』も、自分達の意味でゼヘナに転移した訳ではない。その点では同  
じだが、カグヤ達は『呼ばれた』という表現をしていた。〈カグツチ〉の言う通り、根本的  
に経緯が違ったのかもしれない。

「じゃあ、カグヤ達は普通とは違う方法で元の世界に戻っただけで、無事なのかな……？」

例えば、ゲーム内で死んだキャラクターが、再スタート時に完全回復するように。

『かもしれない——というより、そう願うしかあるまい。確認する術すべなどないのだからな』  
だったら良い方向に考えよう——という事か。

「……………」

「行きましよう、やみひめさん」

「ツバキ……」

カグヤ達の最後を見ていないとはいえ、こんな風に切り替えられるツバキをすごいと思う。彼女にも思うところがあるはずなのに、凜として、今やるべき事を成そうとしている。

「随分と長居をしてみました。……私が気を失っていたせいもありますけど」

立ち上がり、苦笑を浮かべつつ、ツバキが手を差し伸べてくれる。妹の手を引こうとする姉のように。

（私の方がお姉ちゃんだけだなあ……）

口には出さず、差し出されたツバキの手を握る。その瞬間、最後に見たカグヤの表情が脳裏を過った。

「うん——行こう！」

消えてしまったカグヤ達に気落ちしていたやみひめが、急に元気な声を上げたため、ツバキは一瞬きよんとしていたが、すぐにいつものように笑い返してくれた。

きつと心配は要らない。

だって、最後に見たカグヤの表情は、とても嬉しそうだったから。

第三十四話

『ショクザイ、ソシテ——』

『それ』は突如として戦場に現れた。

「よう預かってくれたのう。感謝するぞ」

そう言つて、『それ』は姿異態と呼ぶべき姿となったキリエ・ソウマの胸元を右手で穿ち、何かを探しているようだった。

その様子をカナコはただ、呆然と見つめていた。

状況が理解出来ないというのも無論ある。だがそれ以上に、その光景の中心にいる存在に圧倒されていた。ぞろっとした和服を着た、人間の女性のカタチをした『なにか』。

『それ』が放つ威圧感は尋常ではない。気配からして真つ当な生物を逸脱している。その姿を視界に収めて猶、人間の皮を被った別の『なにか』としか思えない。

キリエの背後で膝を突いているルイゼもまた、カナコと同様に呆然としていた。無理もない。むしろ、『それ』を目の前にすれば誰もがそうなる。真つ当な人間であれば。

例外はキリエくらいだ。すでに正気を失っていたが、身体に穴を開けられているような状態にも関わらず、時折びくりと身体を痙攣させる程度で、むしろ恍惚の眼差しを『それ』に向けている。見様によつては倒錯的な光景だ。

(なんなのよ、あれ……)

直前に自分に向けられた言葉を思い出す。

——『ふむ。なかなかに妾好みやのう、お主』

——『なに、すぐに済む。少しばかり待つておれ』

(次は私の番つて事……?)

キリエと同じように、身体の中を素手で掻き回される不快感を想像し、カナコはゾツとした。

「——ふむ」

『それ』がキリエの胸元から腕を抜いた。手首まで血の色に染まり、しかしそんな事は気にも留めず、キリエの体内から『回収』したらしきガラス玉のようなものを、愛おしそうに見つめている。赤いそれはキリエの血に濡れ、まだ雫を垂らしている。

(MBコア? どうしてそんなものがソウマの中に……?)

先ほどキリエが、ルイゼのMBデバイス(ジービー)の片割れから抜き取り、捕食したMBコアに似ている。だがあれはマシン・ビーストの名が示す通り、機獣が持つ器官だ。(機獣少女)が持つのは機力を運用するための仮想器官であり、実体はなく、出力も稼働効率も機獣のそれとは比べるべくもない。だからこそ(機獣少女)は、機獣のコアを納め

たMBデバイスを必要とする。

(さつき捕食した〈ジービー〉のコア？ でも、あれは——)

明らかに別物だ。『それ』に感じる威圧感と、極めて同質のエネルギーを感じる。『力』  
と言つてもいい。

そうこうしていると、キリエの身体がゆらりと傾き、受け身も取らずに倒れた。身体  
に穴を開けられたからというより、印象としてはMBコアらしきものを抜き取られたせいに  
思える。恐らく、あれが変異態と化した原因であり、それを抜かれてしまった事で状態  
を維持出来なくなったのだろう。

「……………」

キリエに感じていた怒りや憎しみが急速に萎えていく。

彼女は身体を痙攣させ、自分をこんな目に遭わせた相手を恍惚の眼差しで見上げ、助  
けを求めるでもなく、恨み言を吐くでもなく、ただ呻き声のようなものを発するのみ。先  
ほどまで猛威を振るっていた者とは思えず、憐れにすら思える。

「ふむ。人間の身体というのは存外、脆いものなのじゃな」

『それ』はキリエを見下ろし、知らなかったと言わんばかりの表情を浮かべた。医学の知  
識などなくても、身体に穴を開けられればどうなるかなど、教えられずとも想像はつく。

やはり『それ』は、人間のカタチをしているだけの別の生き物なのか。

「あ……ああ………」

「苦しいか。暫し待て」

苦痛に喘いでいるのではないとはいえ、『それ』は平然とキリエを待たせ、彼女から抜  
き取ったものを矯めつ眇めつする。数秒そうしていると、思いついたとはかりに口を開き、  
先ほどキリエがそうしたようにMBコアらしきものを飲み込んだ。人間であれば、何かを  
体内に取り込もうするなら、通常は口から摂取するしかない。人間の身体の構造を踏まえ  
た上での、『それ』にしてみれば至極当然の選択だったのかもしれないが、カナコにしてみ  
ればありえない。そうだ。やはり『それ』は人間とは違う生き物なのだ。

「——っ!？」

『それ』がキリエの体内から抜き取ったMBコアらしきものを嚙下した直後、これまで以  
上の異質な気配が、辺り一帯に溢れた。同時に威圧感も増し、やや慣れてきていたにも関  
わらず、もう立っている事すら儘ならない。

「ふう……ん?」

片膝を突いたカナコに気付き、『それ』が首だけで振り向いた。肩をくすぐる黒髪がさ  
らりと流れ、紅い瞳が此方々を向く。流し目で見下ろされ、唇は飲み込んだMBコアら



しきものに付着していたキリエの血で紅をさしたようになっており、ひどく色っぽい。モデルやアイドルに興味はないが、それでも見惚れてしまう艶やかさである。

『それ』が真つ当な人間であつたなら。

「ふっ。そんなに妾が怖いか？」

「……ええ。なんなの、あなた？」

挑発とも取れる態度に素直に頷き、しかしせめてもの抵抗と脅えは見せない。

「気丈じゃのう。なるほど、妾はそういう手合いが好きなのかもしれない」

「……？」

『それ』の発言がどういう意味か判りかねた。カナコ以前にも、そういう感情を抱いた相手がいたという事だろうか。

「妾の名はサクヤヒメ。そう呼ぶがよい」

そう言つて、『それ』——サクヤヒメと名乗つた『なにか』はカナコを視界から外し、足元で倒れているキリエに視線を戻した。腰を落とし、何かをしているが、カナコの位置からでは彼女の背中に阻まれ見えない。

すると——

「……ソウマ——」

キリエが立ち上がつていた。胸元の抉られた痕跡は綺麗に消えており、MBジャケットも本来の銀を基調としたドレスアーマーに戻っている。多関節の尾や副腕、赤い羽根やプレート状の鶏冠もない。代わりに、目元を完全に覆つてしまうサングラスのような面を付けているため、表情は見えない。

ただ、口元だけは薄く笑つていた。

「気分はどうじゃ？」

「……ええ、とても良いわ」

気が違つた様子は鳴りを潜め、サクヤヒメの問いにしつかりとした口調で答えるキリエ。ほんの少し前までの常軌を逸した言動は、体内から抜き取られたMBコアらしきものが原因だつたのだろうか。だとしても、その原因を取り除いただけで、肉体や脳が受けたダメージを即座に修復出来るものなのか？

いや、そもそも——本当にキリエは正気に戻つたのか？

「それはなにより。ならば、もうひと働きしてもらおうかの」

サクヤヒメが首を回し、とある建物に視線を移した。すると地面に着きそうな和服の裾から、平たい多関節の尾が現れ、蛇のように先端が同じ方向を向く。キリエ変異態や、大きさは違えど（ステインガー）のそれと同じものだ。先端が左右に開き、砲身が発射態勢

に移行する。発射されるのは当然——

（荷電粒子砲……でも、何を狙ってるの？）

放たれた荷電粒子砲は、二階建ての家屋の一階部分の大半を消し飛ばし、家屋を一瞬で倒壊させた。被害はその遙か後方にまで及んでおり、あたかも巨人が通った跡のような有様となっていた。

だが、サクヤヒメの目的は破壊ではなかった。荷電粒子砲の発射直前、家屋の陰から飛び出す三つの影があった。（FA::Gエンタテインメント）のライカ・ユズキとバナラ・イカルガ、そして地球からの転移者の一人であるクラウ・P・ブランである。クラウは上空に逃れた後に降下するのを確認していたが、あとの二人も無事だったようだ。

「暫く相手をしておいてくれ。二人なら問題なからう」

「御意」

指示を受け、バイザー面で表情の見えないキリエがクラウ達に向かう。明らかに戦うつもりだ。

「——さて、待たせたのう」

サクヤヒメが今度は全身で振り返る。キリエに加勢するつもりはないらしい。時間稼ぎなら三人相手でも事足りるかもしれないが——

（けど、あの三人を相手に一人で……え!!）

ちらと向こうの様子を窺うと、キリエに加勢する者が見えた。チャイナ服と呼ばれる特徴的な衣装を身に纏い、凶器であり鈍器である槌矛を、小さな身体で振り回す少女。

瀕死の重傷を負っていたはずのモカだ。

「……………」

動揺しているのはクラウ達も同じらしい。キリエと同じバイザー面で表情を隠し、攻撃を仕掛けてくるモカに対し説得を試みているようだが、聞く様子はない。怪我人とは思えない動き——というか、怪我の痕跡が見当たらない。やはりキリエと同様、サクヤヒメになんらかの処置を受けたのか？ その代償としてモカは協力させられているのか？ だとしても、そんな時間などなかったはずだ。倒れているモカから離れた直後にサクヤヒメは現れたのだから。

「だいぶ混乱しておるようじゃの」

「……っ?!」

言葉通り混乱した状態で、サクヤヒメの感应的な囁きが、すぐ耳元で聞こえたというのものもある。だが、カナコが驚いた理由はそれだけではない。ついさっきまで戦場と化した市街地にいたはずが、今は広い——運動公園と呼べる規模の場所にいた。

「……………」

だが、驚きは一瞬。すぐにその光景に目を奪われた。

この公園に見覚えがあったのだ。

「……………ふむ。この景色、ゼヘナではないな」

自分でも予想外だったのか、サクヤヒメはやや驚いたように言った。

「何をしたの？」

握っていたはずの〈スサノオ〉がなく、解除した覚えもないのにMBジャケットが私服に戻っているため、抵抗など意味がない。それ以上に、今のカナコは自分の命より、この現象——目の前の景色の方が気になっていた。

（私はこの場所を知っている——）

サクヤヒメの眩つぶやきが本当なら、此処ここはゼヘナではない。そしてカナコは、地球から転移現象によってゼヘナに来た可能性が最近になって生まれた。もし、この場所が地球であるなら——

「お主ぬし、なかなか事情が複雑なようじゃの」

「答えて！」

「そう急せくな。時間を気にせずお主と話すため、いわゆる仮想空間を開いた。今回はお主を訪ねる必要があったからの、お主の心象風景がこの場に反映されたのじゃよ」

「……………つまり、思い出の場所？」

「というよりも、強く印象に残っている場所じゃな。自覚があるなしは関係なく。もっとも、現実ではない、完全な空想や妄想である場合も多いがの」

「……………」

カナコには幼い頃の記憶がない。具体的には十二歳の時、荒野で発見される以前の記憶だ。

「さつき、これはゼヘナの景色じゃないって言ったわね」

「言ったのう」

心象風景とは幼い時じぶん分に刻み込まれる場合ケースも多いと聞く。ならば——

「これは地球の景色？」

「さてのう。妾わらわは地球の景色を資料で見た事はあるが、すべてではない。故ゆえに、地球かもしれんし、違うかもしれん、としか言えん」

「だったら、どうしてゼヘナじゃないって言えるの!?!」

ひどく苛いらだ立つ。サクヤヒメののらりくらりとした言い回しもだが、自分の過去を知る手掛てがかりかもしれないものが目の前にあるのだ。以前は自分の過去に対して、特に知りたいた

も思わなかった。だが、ツバキが地球に行ったと知り、その地球から兄かもしれない人物がやってくれば、無関心ではられない。

たらばな

橘 アサト。ぼんやりと憶えている兄に似た印象の少年。

彼が地球から迎えに来てくれた兄だとしたら……。

それは何時いつしか、カナコの中で可能性から願望に変わっていた。

(私は橘さんの妹に似ているらしい)

あくまでアサトの妹が行方不明になるまでの印象にだが、それが十二歳。そして、カナコが発見されたのも十二歳の時で、そこは合致する。

(シングウジの養女になるまで、私の名前はカナコ・タチバナだった)

今はカナコ・T・シングウジ。自分の過去を示す唯一のものだから、ファミリーネームは捨てなくていいと養父母に言われた。

(あとは地球から来た事さえ判れば——)

おもかけ

面影がある程度の容姿はともかく、名前と出身が一致すればもう偶然とは言えない。

転移現象自体、ツバキが初の事例なのだ。確認されていないだけで、実は何人も、しかも地球から転移していた——なんて冗談はない。ツバキは戻ってきたのであり、フアフロウ姉妹も地球からツバキを送ってきただけであって、出身は違っらしい。

その後によってきたアサト達は意図せず転移現象に巻き込まれた。それを踏まえればカナコも五年前、同様に地球から転移し、記憶を失った状態で発見された可能性がある。

(だけどこれじゃ……)

ふりだしに戻った。

こんなにも自分の中の願望が大きかった事に気付いてしまった分、落胆もまた大きい。

「……ごめんなさい」

怒鳴ってしまった事を謝る謂いわれはないかもしれない。サクヤヒメは正体不明だが、少なくとも友好的な存在でないのはキリエとモカの例を見れば明らかだ。クラウド達に向けて荷電粒子砲を放ち、二人と戦わせてもいるのだから。

「この景色がゼヘナでないと断言出来る理由——それは月が一つしかないからじゃ」

「……え？」

カナコの謝罪に対して、サクヤヒメはそう言った。それが脈絡のない発言に一瞬思え、しかし先の問いに対する答えだと気付く。

確かに空を見上げれば真昼の月が見えるが、一つしかない。ゼヘナには二つあるのが当たり前なので、不思議と言えは不思議だが、かといって騒ぐほどの違和感でもない。

(そういえば、ツバキが言っていた。地球の月は、太陽と同じで一つしかないって)

だがその情報も、この景色が地球の可能性があるという以上の裏付けにはならない。  
 (そもそも、私の空想や妄想の景色かもしれないのよね……)

であれば、この場所を特定する事など不可能だ。

「——さて。そろそろ本題に移ってもよいかの？」

飽きたと言わんばかりの調子で、サクヤヒメはそれこそ欠伸でもしそうな雰囲気と言った。

不思議だ。通常空間でないためか、あの威圧感も異質な気配も、今はまるで感じない。  
 わざわざ益のない質問に答え、雑な態度とはいえ、こうしてお伺いまで立てている。

(私を訪ねる必要があったって事は、ひよっとして仮想空間での主導権は私にある?)

悟られないよう表情は変えず、サクヤヒメの様子を窺う。

言葉遣いや雰囲気、式典でも見かけないぞろっとした和服を着こなしているためもっと上に錯覚してしまうが、純粋な年齢は二十代半ばといったところだろう。肩をくすぐる程度の長さのストレートの黒髪。どこか魔的な紅玉のような紅い瞳。  
 改めて美人だと思っ。

人間でないと判った上で、それでもころっと落ちてしまう男は多いだろう。

「なんじゃ、妾に惚れでもしたか？」

にやと意地の悪い笑みを浮かべ、和服の袖で口元を覆い、流し目を送る和服美人。悔しいくらい様になっていて憎たらしい。これはひよっとしたら、女としての対抗意識がそう思わせるのだろうか。

「そういう趣味はないわ」

「然様か。妾は少しばかり興味があるがの」

サクヤヒメは冗談とも本気とも取れる言い方をし、くつくつと笑った。

いったい何者なのか。突如現れ、キリエからMBコアらしきものを抜き取って飲み込み、身体を治した——表現が適切ではないかもしれないが——キリエとモカを使役しているように見えた。

「……あなた、本当になんなの？」

思いがけず和んだ空気になったが、目の前の存在が何をしたのかを思い返せば、こういう態度に戻る。人間ではないのだ。人間の尺度で相手を理解しようとするな。

だが、こうも考えられないか？

人間でないからこそ理解し合えるかもしれない……。

人間と他の生き物が理解し合えないのは、それ以前に意思疎通が取れないからだ。それでいて人間同士でも言葉が通じない相手というのはいる。

考え方が、価値観が、倫理観が、趣味嗜好が、立場が、他にも様々な違いがあるためだ。では、相手が会話による意思疎通可能な人外の存在であったなら？

「あなたは……」

「その質問にはこう答えよう——ただの〈シユウエンノシヤ〉だとな」

『それ』は——サクヤヒメと名乗った和装の人外は、そう言つて魔的な笑みを浮かべた。



ヒナミ・シテイを決戦の場とする〈ステインガー〉殲滅のための作戦要綱——通称〈ヒナミ総力戦〉は、予想外の展開を迎えていた。

目標である〈ステインガー〉の消息は未だ不明。変異態と呼ぶべき姿となったキリエ・ソウマの敵対行動。新たに出現した和服の女性。更に、瀕死の重傷を負ったはずのモカまでもが敵対行動をとっている。

イレギュラー  
想定外尽くしだ。

(けどまあ、覚悟はしてたさ)

キリエの馬上槍の突きを捌きつつ、ライカは内心で独りごちた。勝算があったとはいえず、極めて危険度の高い作戦だ。覚悟はどうに済ませている。それは他の参加メンバーも同じだろう。

だから——

「バナラ！ モカちゃんを頼む！」

「は、はい……ッ！」

事務所の同僚であり、今日まで生き抜いた戦友は、これだけで此方の意図を酌んでくれた。柄の先端に機力で編んだ光の刃を発生させる剣——ビーム・サーベルを両手に持ち、わざと派手な動きで槌矛の空振りを誘うバナラ。彼女は今の言葉だけで、モカの注意を引いておいてくれという意図を理解したのだ。

「クラウ！ まずはこっちだ！」

「判った。二人で一気に畳みかける——で、いいんだよね」

続けて大型新人に指示を飛ばす。状況に戸惑っている様子だったが、戦場慣れしてい

ないというだけで、彼女もまた驚くほど冷静に此方の意図を理解していた。バナラとクラウは似たタイプかもしれない。理解が早くて、優等生というか、委員長気質というか。

「そういう事——ッ！」

キリエの横薙ぎをいなし、背中に回り込む。愛刀の〈ヘエン〉を両手持ちし、縦に振り下ろす。いわゆる唐竹割り。

「ぐ……っ!?!」

決まった——とは言いがたい。背中に綺麗に入ったが、本気の一撃ではないのに加え、背中の装甲が思いのほか頑丈だった。キリエは呻く程度で、沈まない。

「——ッ！」

だが、攻撃は終わりではない。仰け反ったキリエの正面から、次はクラウが仕掛ける。両腕の手甲に備わる、獣の爪を思わせる四本の刃——ではなく、手甲の側面をキリエの両肩に振り下ろした。ある意味、峰打ちと呼べなくもない。

「ぎ……っ!?! があああああ——っ!?!」

両肩を強打されたキリエが痛みで絶叫する。よく創作の娯楽作品で『安心しろ、峰打ちだ』といった主旨のカッコイイ場面があるが、実際には安心どころか非常に危険なのだ。刃物であれば痛みは一瞬かもしれないが、下手な峰打ちは相手を悶え苦しませた上で死に至らしめる。

つまり、慈悲をかけたつもりが仇となりかねない。

「うわあ……エグ」

「え!?! だって、傷付けちゃったら……ええっ!?!」

思わずキリエに同情して零してしまった言葉に、クラウが慌てる。あ、クールなように聞いて意外とそうでもないところもバナラに似てる——と思いつつ、ライカは両肩を抱いて蹲うずくまって悶絶するキリエを見下ろす。恐らくもう戦えないだろう。表情を隠すサンングラスのような面フェイス以外は、通常のMBジャケットに戻っている今、先ほど五人を相手に猛

威を振るっていた時ほどの力はないらしい。

「いいや、上出来だよ。ちょっと可哀想だが、生きてるだけ儲けもんだよ」

「う、うん……」

次はモカだ。バナラも加えて三人なら、同じように殺さず無力化出来るはず。

そう考えつつ、ちらともう一方の状況を確認する。MBデバイスの片割れを喰われたルイゼは無事。和装の女性はカナコと話しているようだが、この距離では聞き取れない。

「な……っ」

話が終わったのか、カナコが戦場から離れていく。和装の女性から逃げているという雰

囲気ではない。明らかに何かを目指している動きだ。和装の女性も追う素振りを見せない。だが、ライカがもつとも驚いたのは――

「ライカっ!?!」

「ちー!」

クラウの警告に身体と本能が無意識に反応した。まっすぐに突き出された槍の穂先を、〈ヒエン〉で掬い上げるように逸らす。キリエのMBデバイス〈オーディン〉だ。重量級の馬上槍を扱えるような状態ではないはずなのに。

(そういう事か……!)

上体を起こした姿勢で此方を見上げるキリエの、面から薄っすら覗く薄い緑色の瞳と目が合った。

笑っている。油断させ隙を狙っていたのだ。

キリエにこんな狡猾さはなかったはず。良くも悪くも彼女は有名なので、どんな性格か多少は知っている。

(この行動は本人の意思じゃないのか？ だとすれば、原因は洗脳の類か、もしくは妙な面のせい……?)

クラウの援護を受け、ライカは一時離脱。キリエと距離を取る。

「〈戦姫〉……!」

カナコの姿は完全に消えていた。彼女の行動の理由も気になるが、それ以上に気がかりな事――それは一瞬見えた彼女の顔に、今のキリエやモカと同じ面らしきものがあつた事だ。

「まさか、あいつまで……!」

はつきりと見えた訳ではない。見間違いかもしれない。だが、もしカナコが敵に回るような事になれば……。

「ぐっ……!?!」

呻き声にはっと我に返る。バナラが押されている。

主武装の〈ベリルランス〉がないのだ。倒さなくていいとはいえ、全力で戦う訳にもいかず、重量級の槌矛を使うような敵を一人で相手にし続けるのは厳しい。そして、それはクラウも同様だった。背中の羽根を損傷しており、彼女の武器と言える機動力が封じられている今、本来の能力を發揮しきれていない。

完全に当てが外れた。今の戦力で、キリエとモカを傷付けずに無力化するのは不可能だ。ならば殺すのか？

〈カタストロ〉でも〈プレケース〉でも〈ステインガー〉の幼体でもない、人間を……。



「——以上が、変更前のこの世界の出来事だ」

アニスは一拍置くと、聴衆——ロゼット・コダールと橘アサトの様子を窺った。どちらも呆然としている。信じられないというより、スケールの壮大きさに実感が持てずにいるのだろう。特にアサトはゼヘナの人間ですらないのだから、それも仕方あるまい。

封印施設を後にした彼等は、カーゴトレーラーで北上。〈ステインガー〉の殲滅作戦が行われているヒナミ・シティを目指していた。作戦が終われば参加メンバーを回収しなくてはならないし、最悪、失敗していたとしても状況の確認をする必要がある。

その道すがら、アニスは取り戻した記憶——ゼヘナで起きた世界変更前の真実を二人に聞かせた。

発端は封印施設で発見した少女アヤカ・シユバイツァー。

彼女は人類初のMBドライバーにして〈始まりの機獣少女〉。

そして、ゼヘナで起きた世界変更の中心にいた人物でもある。

「……信じられないというより、信じたくない話だね」

ロゼットは悲しそうな表情を浮かべた。彼女は優しい人間だ。出来ればあまり、この手の話題には触れさせたくないほどに。

「……………」

一方、アサトは何も言わずに、ベッドで眠り続ける少女——アヤカを見つめた。十八歳という年齢に不相応な気怠い表情だが、思うところはあのだろうか。当然だ。たかだか十数年しか生きていない少女が紡ぐには、その物語は過酷に過ぎる。

悲しみと憎しみを終わらせるため、彼女が選んだのが世界変更だった。それしか選択肢がなかった。だからそれは選択肢とは呼べない、たったひとつの冴えたやりかた。

「出来る事なら、我も忘れたままでいたかった」

古代種であるアニスですら、変更の影響から免れなかった。そして、古代種だったからこそ、変更の事実に気付いた。封印施設で眠り続けていたアヤカの目覚めによって。

（これからどうなる……）

〈ステインガー〉が目覚め、このままでは人類の生存圏が脅かされる。だがそれは、言ってしまうそれだけだ。ゼヘナという惑星から、人類という種が失われるだけ。

しかしアニスは、事態がそう単純ではない気がしてならなかった。

「……………なんだ？」

不意に、何かが近付いてくるのを感じた。恐らくは〈機獣少女〉。だが、ヒナミ・シティまではもう暫くかかるはずで、まだ機力を感じられるような距離ではない。

「え？ なに……？」

天井から聞こえた音にロゼットが反応した。何かかカーゴトレーラーの上に乗っているのだ。恐らく、アニスが接近に気付いた〈機獣少女〉だろう。

眠っているアヤカを除く全員が天井を見つめていると、其処に『線』が奔った。それは一辺が約二メートルほどの正方形を描き、直後にカタナの切っ先が顔を見せた。正方形に切り取った天井が落下しないよう、串刺しにしたのだろう。次の瞬間には天井は外に放り投げられ、夜空に浮かぶ二つの紅い月が見えた。

そして、ひとりの少女が車内の仮眠室に降り立った。

長い黒髪。黒い袴のMBジャケット。得物は前述の通りカタナ。

「……カナコ？」

間違はなくカナコ・T・シングウジだ。ヒナミ・シティで戦っているはずの彼女がなぜ？ というのもあるだろう。わざわざ天井を破壊して侵入する必要もない。だが、ロゼットが疑問形なのは、カナコが見慣れぬ面をしているからだ。それも、夜には不向きなサングラスのような。

「お迎えに上がりました——兄さん」

ロゼットを一瞥し、しかしカナコは何も言わずアサトの眼前に立ち、そう言った。

『兄さん』……？ カナコ、君は——」

動揺するアサトを余所に、我慢の限界とばかりにカナコは彼の胸に飛び込み、そのまま彼を抱き締めた。面で隠れて表情が見えずとも、彼女が恍惚の笑みを浮かべているのは一目で判る。

（彼女は幼い頃の記憶がなく、身元不明だったはず。橘アサトが兄とはどういう事だ

……？）

アサトはされるがまま、困惑している。ただ、嫌悪や拒絶といった感情はないらしく、純粹にどうすべきか反応に困っている様子だ。

すると——

「……兄様？」

天井から入る夜の冷えた空気のためか、ベッドで眠っていたアヤカが目を覚ました。その視線の先には、彼女が『兄様』と呼ぶ少年と、その彼に抱きついてる少女。

「——」  
 カナコはアヤカを一瞥し、無言でアサトを抱擁したまま跳躍。自ら開けた正方形の穴を抜けて車外に出た。屋根に着地した様子がないところを見ると、そのまま走行中のカーゴトレーターを降りたのだろう。

「えつと……どういう事？ アサト君、攫われちゃった？ でも、今のカナコだよね？ ええ……っ!?」

ロゼットが困惑しているが、それはアニスも同じだ。カナコが顔見知りで、敵意や殺意も感じさせず、緊張感より戸惑いの方が大きかった。だが、走行中の車両の屋根に穴を開けて侵入し、乗員を連れ去った——状況だけで言えば完全に誘拐である。

「……………」

風通しの良くなった天井から夜空を見上げるアニスには、別の疑問も浮かんでいた。カナコから微かに〈ステインガー〉の気配を感じたのだ。

（いったい彼女に何が起きたのだ……）



過剰と言っているほどに供給される機力を圧縮し、弓に似た形状へと変化している〈ガツチ〉から撃ち出す。三点射はいつも通りだが、今回のそれは射程と威力が桁違いだ。命中を確認する前に、次は左側のバナラへ援護射撃。どちらも当てる必要はない。増援が来たと敵味方にアピール出来ればいいのだ。それだけでも敵には動揺を与え、味方の戦意は上がる。

〈ブラスター・システム〉を改めて起動し、再び弓道着のようなMBジャケット姿になったツバキは、〈カグツチ〉を経由して流れ込むやみひめの機力の量に驚愕を覚えていた。尋常ではない。まともに使えば三分程度しか維持出来ないほどに、〈ブラスター・システム〉は機力の消耗が激しい。だが、今の状態なら一晩中でもこの姿でいられそうだ。

機能も底上げされており、射撃性能だけでなく、加速性能も格段に上がっている。（私が気を失っている間に、カグヤさんと〈シラヒメ〉さんは消えていた。やみひめさんの今の状態は、それと関係があるのだろうか……？）

ちらと並走するやみひめに視線を向ける。MBジャケット自体に変化はない。だが、まるで血液が循環するように、紅い光の線が走っていて、時折、それが燐光のように袖や裾から零れ落ちていく。余剰となった気力が排出されているのだ。

（私に機力を供給して猶、有り余っているなんて……）

視線に気付いたのか、やみひめがにこりと笑った。ツバキもまた微笑を返す。

(どうでもいい。やみひめさん自身は何も変わっていないんだから)

撃った機力の弾丸が着弾し、戦場に動きが見えた。キリエを狙ったものは全弾命中。背中に生じた衝撃に驚いている。モカを狙ったものは気付かれ、二発は回避、一発は槌矛メイスを盾に防がれていた。その隙にクラウとバニラは態勢を立て直し、ライカは二人の支援サポートを行っている。上々だ。

「では、手筈通りに」

「任せて！」

頼もしい。地球にいた時からずっと精神的な支えではあったが、自前のMBデバイス(ヤタガラス)を持つて戻ってきたからは、(機獣少女)としても頼もしい存在になっていた。もう戦っても勝てないかもしれない。

(そういえば、MBジャケットを装備した状態で戦った事はなかったっけ)

あるのは地球で、基礎的な訓練をした時だけ。その際はやみひめだけがMBジャケットを装備していた。彼女が(ヤタガラス)を手にした後も、共闘はあっても、ぶつかった事はない。別に戦うのは好きではないが、少しだけ興味はある。

(すべて終わったら、模擬戦を申し込んでみようかな)

そのためにも——

「——っふ」

息を吐き、機力弾を三点射スリー・バースト。引鉄トリガーを引きつ放しにし、継続的に撃ち込みながらキリエに接近する。こういう時、飛び道具は便利だ。基本的に(機獣少女)は飛び道具を持たないため、一方的に攻撃が出来る。しかも今は威力が上がっているため、キリエのドレスアーマーに次々とダメージが蓄積されていく。

此方こちらが攻撃範囲に入るまで待てなかったのか——一方的な攻撃で余程苛立いらだっていたのかもしれない——キリエは得物えものの馬上槍ランスを投槍ジャベリンよろしく投擲とうてきした。何か機能を付加しているのか、それは重力下であるにも関わらず空中で加速し、ツバキを穿うがとうと飛来してくる。

しかし——

「……………あ——」

聞こえはしなかったが、表情を見ればキリエがなんと発したかは容易に想像がつく。必殺のつもりで放った攻撃があっさりかわと躲され、それによって丸腰かになってしまったのだから無理もないが。

どんなに威力や速度があろうと、まっすぐにしか進まず、しかも投擲前に判っていれば

回避は容易い。軸線から外れるだけでいい。結果、キリエのMBデバイス（オーデイン）は彼方へ。ツバキはそのまま彼女に肉薄し、

「——みぎやっ」

「あ……」

キリエの顔面に着地。ドロップキックのような体勢になったが、狙った訳ではない。彼女が目測を誤ったのか、姿勢を下げたのだ。仕方なくツバキは、そのままキリエの顔を踏み台にする形で彼女から離れ、入れ替わるように後続のやみひめにバトンを渡した。

「——その威を示せ！」

やみひめは右手をキリエの胸元——実際には胸元に発生している不思議な空間——に突き入れ、すでに準備していた（分断するもの）を発動。直後、キリエの身体から『淀み』とでも表現すべきものが切り離され、霧散した。

やみひめが右手を抜くと、キリエは脱力し、そのまま地面に膝を突いた。やはり何かしらの影響を受けていたのだ。ならば（分断するもの）で対処出来る。

「次は——」

「ライカ、バニラ！ その子を押さえて！」

ツバキが動くより早く、状況を理解してくれた者がいた。

クラウド。彼女はモカに近く、その背後にいた二人に指示を出してくれた。

「よく判ないけど、あいよ！ バニラ！」

「は、はい！ 押さえればいいんですね！」

ライカに引きずられるようなかたちで、バニラも対応してくれた。クラウドが正面からモカを牽制し、それをライカとバニラが背後から羽交い締めにする。高校生が三人がかりで小学生を取り囲む——クラウド実際には小学生なのだが——光景は、絵面としてはかなりひどい。

「そのまま押さえてて！」

やみひめの紅い光を纏った右手が、キリエの時と同じように、今度はモカの胸元に突き入れられる。

「——その威を示せ！」

やみひめの背中に展開された、鋭利な刃のような六枚の羽根が、微細な振動を放つ。モカの小さな身体がびくりと震え、やはり『淀み』のようなものが切り離される。それが霧散すると、モカは脱力し、今度は背後の二人に支えられるかたちとなった。

「ありがとう、クラウド。よく何をするつもりか、すぐに判ったね」

「うん。私の時もああして助けてくれたって、なんとなくだけ憶えてたから……」

やみひめが初めて〈分断するもの〉を使った時の事だ。クラウドも同じようにして〈カタストロ〉から解放された。あの戦いから、まだひと月も経っていないはずなのに、ひどく懐かしく思える。地球からゼーナに戻ってからも、波乱続きだった事も大きい。

そんな事を心の片隅で思いながら、ツバキはやみひめとクラウドの様子を眺めていた。二人は同い年のクラスメイトで、仲の良い友達同士でもある。

(ヒノカゲさんはどうしているだろう……)

ゼーナに戻ってきてから距離が縮まったクラスメイトを思い出す。せつかく仲良くなれたのに、学校に行っていられる状況ではなくなってしまったため、ずっと顔を合わせていない。

「——やれやれ。やはり厄介じゃのう、己は」

少し気怠い大人の女性の声。時代がかったというより、いつそ時代錯誤で芝居がかった口調。こんなしゃべり方をする存在が、現在の惑星ゼーナにそう何人もいるはずがない。

「サクヤヒメ……」

ツバキが声の主を視界に収める。ぞろっとした和服を身に纏った、黒髪の女性——の姿をした人間とは別の生き物。(ステインガー)の化身とでも言えはいいのか。

「妾の名を呼ぶなら敬意を込めると言っただけじゃがの」

言葉とは裏腹に、サクヤヒメに腹を立てている様子はない。むしろ面白そうに、薄い笑みを浮かべてすらいる。

「もう、怖くありませんから……!」

「……ほう?」

未だにサクヤヒメに対する畏れはある。気を抜けば威圧感で押し潰されそうになる。だが、やみひめから供給されている機力のためか、気を張っていれば耐えられるようになっていた。陳腐な表現かもしれないが、勇気をもらえているような感覚だ。

「ねえ、どうして人間を滅ぼさなくちゃいけないの?」

やみひめが隣に並び、サクヤヒメに問う。

「理由を訊いて、納得すれば滅んでくれるかの?」

「そうじゃない! 理由が判れば、滅ぼさなくてもよくなるかもしれないでしょ!」

やみひめの言っている事は正論だ。だが、そんなものは理論武装でいくらでも突破出来る。建前や口実さえあれば、本音が『気に入らないから』でも押し通せるのだ。

「ならば答えよう——」

サクヤヒメの表情から薄い笑みが消える。

「妾は人間という種が気に入らん。この星に存在しておる事自体が不快でならん」

交渉の余地がまるでない。

嫌いな相手とは顔を合わせなければいい。だが、存在しているだけで許せないというのであれば、もうどうしようもない。

「……………そう」

「やみひめさん……………」

話を通じない相手というのは存在する——そんな事を言っても慰めにはならないし、やみひめも求めてはいないだろう。ぐっと拳を握る。どうしてこうも、世界は理不尽で溢れているのか。いつそ腹が立つ。

だが、理不尽という感情は人間だけが持つもの。それを感じながら生きなければならぬのが人間の『業』なのだとしたら——

(……………くだらない)

馬鹿な考えを振り払う。

「あなたが人間を滅ぼすというのなら、私達はそれに抗うだけです」  
互いに譲れないのであれば——もう、戦うしかない。

気丈な少女——ツバキといったか——の啖呵に、サクヤヒメは内心で称賛の言葉を送った。

先の言葉は嘘ではない。種としての人間は嫌悪すべき存在だ。だが、目の前の少女達のように、強い意志を持って立ち向かってくる者は嫌いではない。むしろ好ましい。

だが、それでも——

「ならば聞け、人たるものよ。妾はサクヤヒメ。己等が〈ステインガー〉と呼ぶもの。

そして——」

再び薄い笑みを浮かべる。

「かつて、〈シユウエンノシシヤ〉と呼ばれたものじゃ」

終わりを始めよう。

本当の終わりを——

## あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十四話をお届け致します。

年内最後の更新となります。キリの良いところまで書きたくて、三十ページを超えてしまいました。如何だったでしょうか？

前回まで猛威を振るっていたキリエですが、今回すでにポンコツに戻りつつあります。そういう意味では此処からがキリキリの本領発揮と言えるかもしれません。こういうキャラほど凶太く、割りと幸せに生きていけちゃうという……やだ、ちよつと殺意☆

カグヤはちよつと二年前のラストに姿を現し(劇中で存在の描写はありましたが)、それから四話で退場。半年も待たせておいてこの扱い。でも仕方ない。過去作ではもう一人の主人公扱いだから仕方ない。あくまでゲストだから仕方ない。

あとはラスボス感が半端ないサクヤヒメ。初の一人称が『妾』で、口調が『のじゃ』個人的には新境地です。だって、こんなキャラそうそう出せない。彼女の事も好きになつてもらえると嬉しいけど、どうだろう……。

それでは謝辞を。

まずはチェックをしてくださっている紙白さんに感謝を。長丁場となつてしまいました。が、来年もよろしくお付き合いください。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。年内に終わりませんでした。来年もやみ子と地獄に付き合ってください(『ポトムズ』ネタ)。

それでは、良いお年を。

2018 / 12 / 27 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る